

当所における大腿骨疲労骨折例の検討

公益財団法人 スポーツ医・科学研究所

熊澤雅樹

中部大学 生命健康科学部

横江清司

医療法人承継会 井戸田整形外科名駅スポーツクリニック

亀山 泰

医療法人承継会 びわく整形外科

井戸田仁

医療法人鬼頭会 鬼頭整形外科スポーツクリニック

鬼頭 満

本研究では当所における大腿骨疲労骨折の内、骨幹部疲労骨折の臨床的特徴などを検討したので報告する。

対象は当所で大腿骨疲労骨折と診断された32例33肢の内、骨幹部疲労骨折の16例17肢とした。平均年齢は19.3歳で、男性10例11肢、女性6例6肢、左7肢、右10肢であった。競技種目、症状出現から受診までの期間、初診時X線所見、MRI所見、ジョギング再開時期、競技復帰時期をカルテより抽出し検討した。

結果は競技種目では、陸上競技が9例(52.9%)でその内、中長距離を専門とする症例が8例と最多であった。症状出現から受診までは4週が6例(35.3%)と最多で、12週経過後に受診した症例が3例(17.6%)あり、平均5.6週であった。初診時X線では骨膜肥厚を12例(70.6%)に認めたが5例では明らかな異常所見はみられなかった。MRIは8例に施行しており、全例でSTIR画像上髓内に著明な高信号変化を認めた。ジョギング再開時期は受診後平均4.6週で競技復帰時期は受診後平均8.0週であった。

大腿骨骨幹部疲労骨折の発生部位に関しては、遠位1/3に好発したとする報告や近位から遠位まで各部位に発生したとする報告がある。本研究では近位

1/3から中央に好発していた。発生機序として、弱い筋力や疲労した筋肉による衝撃吸収力の低下と、着地による軸方向のストレスが考えられる。大腿骨の形態からこのストレスは内側後方への圧迫力となり、内側に仮骨形成をみる疲労骨折が多発していると考えられた。

診断に関しては初診時のX線での診断困難例や、疼痛部位とX線上の骨折部位の不一致などがあり診断困難な例が報告されている。早期診断が早期競技復帰につながった報告もあり初診時X線での診断困難例に対しては斜位像の撮影やMRIが有効と思われた。